

創世記 11 章 27 節～17 章 「信仰の父アブラハムを召し、育てた神」

2025 年 6 月 1 日

しばしば日本では、一神教信仰が争いの原因になっているかのように紹介されることがありますが、ユダヤ教もイスラム教も私たちの信仰も、すべて一人のアブラハムから始まっています。イスラム教の開祖マホメット自身も、あくまでも「アブラハムに最も近い者、彼のあとに従った者」(コーラン 3:67)として紹介されます。ですから、アブラハムの信仰の原点に立ち返ることこそ、世界の和解の鍵になるとも言えましょう。

ただ私たちはアブラハムを飛び抜けた偉人、見習うべき模範として見るという習慣がつきすぎているのかも知れません。たとえば、イスラム教の聖典コーランにも、「アブラハムは一つの模範(イマーム)であり、神(アラー)に従順(イスラーム)で、純正な信者(ムスリム)であった。多神教徒ではなかった。自分を選んで正しい道に導きたもうた神のみ恵みに感謝していた」(16:120,121)と描かれています。ところが聖書には、アブラハムの愚かさや数々の失敗が記録され、彼を一方的に召し、彼にご自身を繰り返し啓示し、彼の生涯を通してご自身を証された神ご自身の忍耐を強調しています。つまり、万物の創造主である神は、太陽や月を拝む民に対して、アブラハムという生身の人との関わりを通してご自身を現してくださったのです。そして、アブラハムを召して、彼の信仰を育てた神が、私たち一人ひとりをも召していただきます。アブラハムの生涯の中に私たちの生涯が描かれています。アブラハム自身も、「私ではなく、神を見て！」と願っているのではないのでしょうか。私たちも、自分の不信仰をさばく前に、神の愛と忍耐をこそ見上げるべきでしょう。

1. 「あなたは行きなさい、あなたの土地・あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へと」

「これはテラの歴史である」(11:27)からアブラハムの記事が始まります。彼の元の名は「**アブラム**」(高い父)でした。紀元前二千年頃、人々は創造主を忘れ、父のテラさえ「ほかの神々に仕えて」(ヨシュア 24:2)いたと記されています。そのような中で、12 章 1 節では突然、「**主(ヤハウェ)はアブラムに言われた**」と記されます。その時期は、11 章 32 節のテラの死後というより、11 章 28 節の「**カルデヤ人のウル**」であったと思われます。事実、使徒の働き 7 章 2,3 節では、「**私たちの父アブラハムがハランに住む以前、まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れ、『あなたの土地、あなたの親族を離れて、わたしが示す地に行きなさい』と言われました**」と記されています。このことばは何度かに分けて繰り返し語られたと思われます。

「ウル」とは、現在のイラク南東部、当時はユーフラテス川が海に注ぐあたりの、非常に繁栄した文化都市であり、彼は貴族としての安定した生活を捨てて旅立ったのだと思われます。そのときは、父のテラも兄弟のナホルもハランの子である甥のロトも一緒でした。そしてアブラムはサライ(後のサラ)と結婚していましたが、彼女は「**不妊の女**」(11:30)であったと記されます。なお、父テラはハラン(シリア北東部)まで来ましたが、「**そこに住んだ・ハランで死んだ**」(11:31,32)と描かれます。兄弟のナホルはそこに留まりましたが、アブラムは神が示す地にカナンに向かって旅を続けようとします。そこでウルであったのと同じような主のことばがアブラムに臨んだのではないかと解釈できます。それが 12 章 1-3 節に次のように記されています。

「あなたは行きなさい、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へと。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民(くにたみ)とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい(あなたは祝福の基となる)。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をろう。地(アダムー)のすべての部族は、あなたによって(おいて)祝福される」

アダムが食べてはならないと言われた木から食べたとき、「**大地(アダムー)は、あなたのゆえにのろわれる**」(3:17)と宣告されましたが、今や、のろわれた地の上に住むすべての民族が、アブラハムに結びつくことによって祝福されるという途方もない約束がなされました。アブラハムを信仰の父とするのは、ユダヤ人ばかりかキリスト者もイスラム教徒も同様です。ただし、彼も私たちも同じアダムの子孫であり、欠けだらけの人間です。ですからアブラハムに対する神の約束は、イエス・キリストを通してのみ全うされるものです。私たちはイエスを通してアブラハムの人生を自分の人生とします。なお、「**あなたを祝福となりなさい**」とは、聖書協会共同訳では「**あなたは祝福の基となる**」と訳されますが、このアブラムに対するこの約束は私たちにとての約束となっています。イエスが、「**悲しむ者」「迫害されている者」を「幸い**」と言われたのは、

パウロが後に、「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」(ローマ 8:31)と言ったように、神が私たちに代わって、人を祝福し、また報復をしてくださるという約束を前提にしていることです。

なお、**アブラム**がハランでこのことばを聞いたとき、既に **75 歳**でした(12:4)。その一生が 175 年(25:7)であっても、冒険には遅すぎる年齢とも言えました。しかし彼は、日々の生活で何らかの渇きを覚え、いたたまれない気持ちを味わっていたのかも知れません。同じように私たちも、イエスのことがよく分からず、また将来の具体的な約束も明らかにされないままに、イエスが「わたしについてきなさい」と言われたことばに従いました。ある人は、家族の反対を押し切って、また友達から白い目で見られながら、イエスに従う決心をしました。つまり、神は、アブラムを召したようにあなた一人をも召し出してくださったのです。

そしてアブラムがカナンの地の真ん中「シェケムの場所、モレの檜の木のところ」に着いた頃、主(ヤハウェ)がアブラムに現われ、「あなたの子孫にこの地を与える」と仰せられ、彼は「主(ヤハウェ)のために…祭壇を築きます」(12:6,7)。さらにそこから南に下り、「ベテルの東にある山の方に移動して…そこに主(ヤハウェ)のための祭壇を築き、主(ヤハウェ)の御名を呼び求めた」と記されます。これら一連のアブラムの歩みに、主(ヤハウェ)が語りかけ、彼が従い、主がご自身を現わし、彼が祭壇を築き、祈るという好循環が描かれます。

ところが彼は、そこに留まらずに、なおも南へと旅を続け、さらに飢饉に追われるようにエジプトに入ってしまう。しかも、彼は自分の身を案じ、美しい妻を、妹として紹介し、ファラオに召し抱えられるままにしました。これはサライに対する不誠実であるばかりか、主が彼に「あなたを大いなる国民とする」と言われた約束を、自分で反故にしてしまう不信仰な行いです。アブラムはサライが不妊の女で自分に子が生まれないことを悩みながらも、不可能を可能にしてくださる神に信頼し、ここまで従ってきたはずでした。しかし、危険が迫るとそれを諦めようとしたのです。神の介入で、結果的に、多くの奴隷や家畜を贈り物として受けることができたにしても、その行動は決して正当化できることではありません。主がファラオを痛めつけなければ、妻は戻って来ることはできなかったからでした。しかし主は、彼に「あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう」(12:3)と約束しておられました。それで、彼が妻にもエジプトの王に対しても不真実だったにも関わらず、幼児を育てるようにアブラムの信仰を育ててくださったのです。私たちも、せっかく神に従い始めながら、つい人間的な打算で動いてしまうことがあります。それでも主は、不信仰をすぐにさばく代わりに、私たちの側に立って恵みを与え、信仰を成長させてくださいました。

2. 「アブラムは主(ヤハウェ)を信じた。それで、それが彼の義と認められた」

主のあわれみによって、アブラムばかりか、一緒に来たロトも、「所有するものが多すぎて、一緒に住めなかった」(13:6)ほどに豊かにされ、ベテルまで戻ることができました。アブラムは、主こそがすべての富の源であることを体験した結果、まずロトに好きな土地を選ばせる余裕が生まれました。ただロトは、土地の豊かさだけを見て、非常な罪人たちで満ちているソドムのあるヨルダン低地を選んでしまいました。

主の祝福を体験したアブラムは人間的な計算を超えた行動を取ることができました。主はそれを喜ばれ、「あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与える」(13:15)と約束されます。その後、彼はヘブロンに南下しましたが、すべての土地の真の所有者は神ご自身であることを信じ、アモリ人の族長マムレ(14:13 参照)の所有する「檜の木」のそばに(13:18)、まるで軒を借りるように仮住まいをすることで満足できました。彼はそこでも、「主(ヤハウェ)のための祭壇を築いた」と記されます。

ところで、当時は都市国家間の争いが絶え間なくありましたが、ある時、四人の北の王の連合が、五人の南の王の連合を死海の南の「シディムの谷」で打ち負かすということがありました(14:8-10)。その際、ロトも戦いに巻き込まれ、財産ともども北に連行されます。それを聞いたアブラムは「彼の家で生まれて訓練された者 318 人を引き連れ」(14:14)、カナンの北の果てまで追跡し、彼らを取り戻します。なおこれは、彼がどれだけの大集団で、カナンの地に入って来たかを示す数字でもあります。それにしても一介の寄留者に過ぎないアブラムが、強大な北の連合軍に勝てたことが不思議です。それこそ主のみわざです。

なおこの後、彼はこの勝利を主に感謝し、サレム(エルサレム)の王、「いと高き神の祭司」メルキゼデクに「すべての物の十分の一を…与え」ました(14:20)。これは、収入の十分の一を主に聖別した最初の記録です。一方で、彼は、ソドムの王との取引を拒絶し、自分を富ませるのは主(ヤハウェ)ご自身であることを宣言します。主はそれをまた喜ばれ、「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報い

は非常に大きい」と語りかけます(15:1)。これは本来、戦いの前に聴くべきことばだったでしょうが、人は緊張が解けた時こそ、大きな恐れに囚われがちなので、主はこのタイミングでそう言われたのでしょう。

それに応えて、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらなかったので、私の家のしもべが私の跡取りになるでしょう」(15:3)と言います。これはサライを自分の妹と偽って、ファラオに召し入れられるままにしたことを忘れたかのような不信仰な泣き言です。ところが、主はそれにも優しく応えられ、「あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない」と言われます(15:4)。その上で、彼を外に連れ出し、「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい・・・あなたの子孫は、このようになる」と言われました(15:5)。そしてそれに対し、「アブラムは主(ヤハウェ)を信じた。それで、それが彼の義と認められた」(15:6)と簡潔に記されます。これはパウロが繰り返し引用する信仰の核心のみことばで、「信仰義認」と呼ばれます。多くの人は、「信仰」を積極的な心の働きや不動の心、不可能にかけてゆく熱い情熱のように誤解します。しかし、神から義と認められた「信仰」とは、満天の空を見上げて、神の約束を聞き、それに心で「アーメン」と応えるという極めて受動的なものでした。ところで、私の場合は、自分の信仰は義とされるにふさわしい信仰かと悩んだ時期がありました。しかし、主のみことばが自分に迫ってきて、それに「アーメン」と応答した結果、教会につながっています。欠けだらけのアブラムの信仰を導かれた神は、私たちのひ弱な信仰をも喜び、受け止め、育んでくださっておられるのではないでしょか。

それにしても、主(ヤハウェ)の約束には、子孫を増やすことと土地の相続という二つがありましたから、この後、主は、「わたしは、主(ヤハウェ)である、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルから導き出したもの」と改めて紹介します(15:7)。ただ、このときアブラムはそれで満足する代わりに、「何によって分かるでしょうか、私がそれを所有するということを」と敢えて問い続けます(15:8)。それに対して、主は、当時の契約の儀式を用いて約束を保証されました。それは双方が、裂かれた動物の間を通り過ぎ、約束を果たせなければ自分も切り裂かれてよいと宣言することでした。しかし、不思議にも、ここでは、神ご自身だけが、「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」として「切り裂かれた物の間を通り過ぎ」、一方的に誓約してくださったのです(15:17)。それは、主が人の弱さを知っておられたからです。

ここで主が一方的に約束してくださったことは聖書の要約とさえ言えるもので、彼の子孫がエジプトで四百年の間寄留者となり、多くの財産を持ってそこを出て、エジプトの川からユーフラテス川に至る約束の地を占領するというものでした(15:13-21)。モーセに導かれた出エジプト、ヨシュアに導かれた約束の地への進入は、この約束の成就でした。それは、アブラムの率直な問いかけから生まれたものです。この約束はダビデ、ソロモンのもとで成就され、今も多くのユダヤ人はその再度の成就を夢見ています。

聖書の中心的なテーマは、主がご自身の契約に真実であられるということで、それはヘブル語でヘセドと呼ばれます。英語では「尽きることのない愛」とか「揺るがない愛」と表現され、新改訳では、「恵み」と訳されます。聖書は、神の約束が一つひとつ成就する記録であり、それを通して私たちはこの世界が「新しい天と新しい地」また、「新しいエルサレム」に確実に向かっていることを知る事が出来ます。

3. 「これが・・・わたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる」

アブラムがカナンの地に入ってから十年後の 85 歳の時、サライは妊娠をあきらめ、女奴隷を通して子をもうけようとし、アブラムもサライに同意します(16:2)。二人とも神に信頼してここまで待ち続けてきましたが、待ちきれなくなり、当時の習慣としての人間的な判断に従ってしまいました。そこから悪循環が始まります。ハガルはみごもった後に、サライを見下げた態度を取ったので、サライはアブラムに、「私に対するこの横暴なふるまいは、あなたのせいです(別訳)・・・主(ヤハウェ)が、私とあなたの間をおさばきになりますように」とまで訴えます(16:5)。アブラムはハガルを厳しく指導する代わりに、サライに「あなたの好きなようにしなさい」(16:6)と、逃げの態度を取ります。それに応じて、「サライが彼女を苦しめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った」と描かれます。アブラムの子を宿していたハガルが逃げ出すというのですから、サライはどんないじめ方をしたのか興味が湧きますが、その背後には、自分の子の行く末よりも、妻の怒りの方を恐れるアブラムの臆病さが隠されています。まさに、信仰者以前に、家長として失格者と言えます。

結局、主の御使いが逃げ出したハガルに現われ、「女主人のもとに帰り・・・身を低くしなさい」と命じるとともに、子孫の祝福を約束し、イシュマエルが誕生します(16:9,10,15)。当時の感覚では、アブラムの長

男は彼になるはずです。イスラム教徒はアブラハムの後継者はイシュマエルで、イスラムの聖地、メッカのカアバ神殿はアブラハムとイシュマエルが基礎を据えたと信じています。16章12節には「彼は、野生のろばのような人となり…すべての兄弟に敵対して住む」と描かれ、このことばが25章18節でも繰り返され、彼らがイスラエルの陰のような12部族となり、アラビア半島に広がります。残念ながら、現代のユダヤ人とアラブ人の対立の構図がアブラハムの時代に遡って見られます。ただその責任は、誰よりも、家長であったアブラハムに帰するとも言えましょう。なおイスラム教ではアブラハムの信仰は理想化されていますが、聖書の世界では決してそうではありません。すべてが神のあわれみによるということが強調されています。

その後、主は13年間も沈黙されます。それは、誕生した子どもの自立を待つ期間であると思われます。とにかく、アブラムが人間的な判断で動いたために、神の約束の成就を遅らせることになったのではないのでしょうか。そして、アブラムが99歳になって初めて、「わたしは全能の神(エル・シャダイ)である」とご自身を現されます(17:1)。これはアブラムの信仰に対する神からの応答ではなく、眠りかけていた彼の信仰を目覚めさせるための啓示とも言えます。これは私たちにとっても、主ご自身の自己紹介です。この際、主は彼に、敢えて「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と命じます。これは「ノアは…全き人であった。ノアは神とともに歩んだ」(6:9)を思い起こさせる、神の選びに対する応答を求める厳粛な命令です。

その上で主は、「これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民(くにたみ)の父となる」と約束され、彼の名を「アブラム」から、「アブラハム(多くの国民の父)」と変えます(17:4,5)。それは最初の約束や先の契約の繰り返しですが、神は、彼の信仰を支えるため、約束を具体化し、新しい名によって保証されたのです。さらに、彼の家の者たち全部の男子に、「わたしの契約は、永遠の契約として、あなたがたの肉の上に記されなければならない」(17:13)と、「割礼」を命じました。これは男子の性器の亀頭を覆っている包皮を切り捨てるもので、人々が新しい命の誕生を、人間ではなく、神のみわざであることを覚えることができるためだったと思われます。「割礼」は神の民の義務である以前に、アブラムをアブラハムへと変えてくださった神の約束を覚えるしるしでした。それは現代の私たちにとってはバプテスマを意味するとも思われます。アブラハム自身、神の約束を、何度も聞きながら、何度もその信仰がぐらつきました。神はそのような彼に、目に見えるしるしを与えて、「わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」と保証してくださしました(17:7)。まさに人間の信仰以前に、神の約束こそがすべてに先行します。

神はさらにサライの名を「国々の母」という意味の「サラ」に変え(17:15,16)、ご自身の契約をサラに生まれる子に受け継がせると約束されます。アブラハムは高齢のゆえにそれは不可能であると思い、それを「笑った」ばかりか、かつて自分とサラが追い出したハガルから生まれたイシュマエルを後継者にするように願います(17:17,18)。それは常識的な判断でした。ただ、主はそれを責めることなく、さらに、「わたしが…契約を立てるのは、サラが来年の今ごろあなたに生むイサクとの間にである」(17:21)と約束されます。

契約の継承はあくまでも、神の一方的なみわざです。そのことを後にパウロは、「アブラハムには二人の息子がいて、一人は女奴隷から、一人は自由の女から生まれた、と書かれています。女奴隷の子は肉によって生まれたのに対し、自由の女の子は約束によって生まれました」(ガラテヤ 4:22,23)と記します。イシュマエルはアブラムとサラの人間的な計算から生まれ、後に敵対関係を生みます。一方、約束の子イサクは、神の「約束」から生まれ、世界の祝福の基となります。なぜなら、救い主イエスはイサクの家系から生まれ、私たちもイエスの御霊を受けて約束の子として新しく生まれることができたからです。そして、今、このキリストの教会こそが、アブラハムの子孫として全地に広がっています。それは、「アブラハムは私たちすべての者の父です」(ローマ 4:16)と記されているとおりです。それによって今、アブラハムへの契約は、今、肉のイスラエルではなく、キリストの教会に受け継がれています。そのことを後にパウロは、「彼らは不信仰によって折られましたが、あなたは信仰によって立っています」(ローマ 11:20)と語っています。

アブラムは人間的な失敗を繰り返しますが、主は、幼児を育てるような忍耐をもって、アブラハムへと成長させてくださいました。彼の信仰は、神の一方的な選びと語りかけから始まっています。同じように、神は私たちをも選び、みことばをもって語ってくださいました。それは今、キリストのからだである教会につながることで証しされています。父、御子、聖霊の三位一体のみわざこそイスラム教との最大の違いです。一人で神の前に立つのではなく、御子があなたの隣に、聖霊があなたの背後にあって、あなたを立て

てくださいます。アブラムの心が、神の約束と目の前の現実との間で揺れながら、主との対話を通して成長したように、私たちも自分の疑念を正直に訴えるような神との対話の中で成長させていただくのです。